大正関東地震における文化遺産の被害と保護、継承
―鎌倉の事例―

鎌倉歴史文化交流館　浪川　幹夫

はじめに

関東地方では、歴史上主な大地震として、鎌倉時代の約150年間に嘉禄地震（1227）・正嘉地震（1257）・正応地震（1293）など7、8回記録があるほか、江戸時代では中頃に元禄関東地震（1703）と宝永富士山噴火（1707）が、幕末頃に安政東海・南海地震（1854）や安政江戸地震（1855）が、明治時代以降には大正関東地震（1923）、神奈川県西部地震（1924）があった（宇佐美龍夫他 2013）。それからすると、巨大地震の頻発期が、13世紀代、18世紀初頭、19世紀中頃、20世紀四半期に存在したことが窺える。さらに現在に至るまで、同地方はこれら以外にも度重なる火災や風水害、戦乱等に巻き込まれており、その都度多くの人命が奪われたほか、貴重な文化遺産の被害も甚大であったことは想像に難くない。そのような中にあって、各寺社（明治維新後は「社寺」となる）では法灯が継承され、人々の努力によって仏像や宝物類が守られてきた。ただ、せっかく守られた文化遺産も、昨今では、全国各地で発生した大災害によって大きな被害を受けている。

ところで、昨年は大正関東地震から100年の節目にあたる。この地震による被害は、鎌倉町で全潰1,455戸、半潰1,549戸、埋没した家8戸。さらに津波による流失113戸、地震直後の火災で全焼が443戸にのぼり、半焼は2戸で、死者412名、重傷者341名を数えた。小坂村（おさかむら）（現大船・山ノ内方面）の被害は全潰450戸、半潰80戸、死者18名、負傷者は23名。腰越津村（こしごえつむら）の被害は全半潰合せて310戸、死者70名であった。また、深沢村（ふかさわむら）も被害を蒙ったが、詳細は不明である。そして、当時の鎌倉町の全戸数は4,183戸で、小坂村の全戸数が635戸。腰越津村は500戸以下だった（鎌倉町編 1930）。戸数・人口も少なく、鉄筋コンクリート造の建物もあまりなかった当時のこれらの数字は、今日の鎌倉と、当地の市民生活にとって重大な意味をもつものと考えられる。

このような状況のなかで鎌倉町は、後述するように皇室からの下賜金や、鎌倉に在住、あるいは別荘をもつ皇族・華族・政財界人から多くの寄附を受けて、比較的早期に復興を遂げた。殊に、鎌倉国宝館は地震後5年で建設されて、不時の災害から文化遺産を守るため、現在も鎌倉のほか県内各社寺の宝物類を数多く受託し公開している。

そこで、本稿では、大正関東地震後の文化遺産の被害とその後の復興について、鎌倉の事例を紹介する。さらにそれらに基づいて、文化遺産の保護・継承が、今後いかに行われるべきか考えることとした。

大正関東地震による鎌倉所在社寺の被害

鎌倉に所在する各社寺の、大正関東地震における被災状況については、以前、浪川幹夫（2023）に詳記した。地震発生直後に町役場が実施した調査では、小町の妙隆寺や乱橋材木座の九品寺など、数ヶ寺で被害が甚大であったために詳細不明の状況がみられたが、その後、鎌倉町編（1930）は、被害別棟数を神社で社殿全潰10棟、半潰4棟、付属建物の全潰15棟、半潰10棟、寺院で堂宇の全潰28棟、半潰25棟、付属建物の全潰82棟、半潰58棟とし、焼失は免れたと伝えている。そして、全潰した諸堂社のうち、とくに建長寺方丈（図1）や安養院

図1　建長寺方丈　鎌倉市中央図書館
地震と崖崩れで全潰。現在の方丈は、昭和15年（1940）に京都般舟三昧院から移築された。

図2　安養院（本堂か）　鎌倉市中央図書館
地震と崖崩れで建物が全潰した。

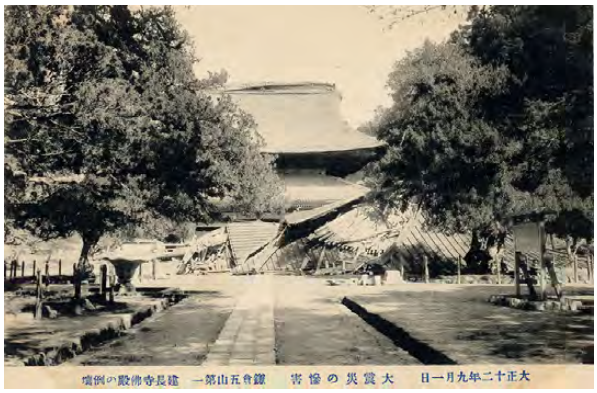

図3　建長寺仏殿（手前）と法堂（奥）　鎌倉市中央図書館
いずれも現重要文化財

の建物（本堂か〔図2〕）等は、崖の崩落による被害も受けたようである。このことは、地震前日の8月31日から9月1日の朝にかけて、藤沢方面で19.5mmの降雨があったこともその理由とされ（中央防災会議編 2006）、強震と大雨が相俟って地滑りや崖崩れが多発し、鎌倉各所で被害が拡大したと考えられている（中西典明他2011）。

さらに、相澤善三（のちの鎌倉国宝館主事）が記した「長谷区 震災誌編纂資料」には、鎌倉大仏が傾斜して前進した要因について、旧台座では間知石の裏込が不完全なため崩壊しやすく、さらにその前側は捨石が無いため沈下したとする記述がある（浪川幹夫 2023）。

公共施設やライフラインなどの復旧・復興について

文化遺産の復興について語る前に、まず、公共施設やライフラインなどの復旧・復興について、鎌倉町内の姿を見ることとする。そこで本項では、鎌倉町編（1930）に記載された、町内におけるそれらの状況を提示した。これを見ると、町の主要施設は地震後4、5年のうちに復興されている。

- 鎌倉警察署：大正14年（1925）10月新築竣功。
- 鎌倉小学校：大正15年3月新築竣功。
- 町役場庁舎：大正15年4月新築竣功。
- 道路・橋梁・下水道：町は大正13年度以降復旧事業に着手し、昭和2年（1927）度に完了した。
- 鎌倉第二小学校：昭和3年度に新築された。

当地で公共施設やライフラインなどの復旧や新築が早期に終了した理由は、国・県の補助金や、皇室からの下賜金などを受けたことにあるが、それ以上に、鎌倉に在住、あるいは別荘を所有した政財界人から、町に多額の災害復旧寄附金が贈られたことも大きかったと考えられる。

町に対する寄附金総額は79,665円ほどであった。そのうち、岩崎小弥太が30,000円、岩崎早苗が5,000円、岩崎俊弥が3,000円などと、三菱の関係者だけで全体の半分ほどが支出された。その他皇族や華族のほか、富岡俊次郎（2,000円）ら地元有力者の寄附もあったが、旧三菱財閥の存在はずば抜けて大きかった。同財閥第4代総帥であった小弥太（1879～1945）は、現在鎌倉歴史文化交流館が建つ無量寺谷一帯に、母早苗のための別荘をもっていた。

そして鎌倉町では、早くも大正15年（1926）7月17日に、震災復興祭が執行された。

鎌倉所在社寺の復興について

山ノ内に所在する建長寺では、とくに仏殿（現重要文化財）の被害が深刻であった（図3）。そこで当堂は、文部省の国庫補助事業として、大正13年10月から同15年5月にかけて、現重要文化財の唐門とともに修理された。現在仏殿の前に建つ、時の管長菅原時保師の篆額ならびに書による「国宝仏殿重修碑」（図4）には、以下に示すとおり修理の経緯や総工費などが記されている（総工費50,500円、国庫補助金42,534円、寺負担金7,966円）。

建長寺仏殿・唐門重修の記（碑文抜萃　ルビは筆者）

…然るに同十二年九月一日（日）関東に大震あり、鎌倉地方其の害殊に甚だしく二宇（仏殿と唐門）亦倒壊全く

図4 「国宝仏殿重修碑」 建長寺　左奥は現仏殿

図5　英勝寺山門（左奥）と鐘楼（右手前）　鎌倉市中央図書館　いずれも現重要文化財

原形を留めざるに至れり、乃ち本寺は災後直に文部省に議り、廃余の残材一切を拾収して其の散佚を防ぎ、以て予め他日の用に備ふ、而して幸に国庫の補助を得、重修の工事は総べて之を神奈川県庁に委嘱す、斯くて大正十三年十月起工、同十五年五月を以て仏殿・唐門共に其の工を竣へたり、抑々本工事の旨とする所は、専ら旧態を存し寸毫も増損せざらんとするにあり、故に古材の苟くも用ふべきは必ず之を用ひ、用に堪へざるものは已むを得ず代ふるに、新材を以てすれども文彩によりて古色を帯ばしめ、以て努めて旧観の美を損せざらしめたり、

なお、現在の仏殿は、寛永5年（1628）芝増上寺に建立された第2代将軍徳川秀忠夫人（崇源院）の御霊屋を、正保4年（1647）唐門とともに建長寺に移築したものである。また、このほかの国庫補助事業による建造物の復興としては、昭和11年（1936）に実施された若宮大路に所在する現重要文化財一ノ鳥居の修復などがある。

一方、町在住の財界人が行った復興事業としては、実業家間島弟彦（1871～1928）による英勝寺山門の移築がある。これは、地震で全潰して再建不可能とされた山門（図5）を買い取って、小町葛西ヶ谷の東勝寺跡に所在した自身の山荘に再建したものである。同山門は現存し、平成19年（2007）度から4ヶ年計画の保存修理で英勝寺に戻されたのち、寛永期の伽藍構成を示すものとして、同25年8月7日に仏殿、鐘楼、祠堂、祠堂門（唐門）とともに国の重要文化財となっている。

鎌倉同人会と、文化遺産の修復や鎌倉国宝館建設について

鎌倉同人会は、大正4（1915）1月に元外交官陸奥広吉（1869～1942）や同荒川巳次（1858～1949・初代鎌倉国宝館長）らを発起人として発会した、鎌倉で最も古い社会貢献団体である。同会理事たちの間では、東京と奈良の帝室博物館や恩賜京都博物館に並ぶものとして、鎌倉の代表的な遺産を世に示しその保全のためにもしっかりとした博物館が必要であると、発会当初から話し合われていたという（三浦勝男編 1969）。そして、博物館建設の機運が高まりを見せるなか、突如大地震が発生した。

地震発生当時、多くの仏教彫刻と宝物類が被災したため、直ちに国庫補助金を得てそれらの修復が開始された。そのうち、仏像や武人像など諸像を修復したのは奈良の美術院で、同院から派遣された仏師や漆工、木工らが担当した。作業は、鶴岡八幡宮境内に仮設された憲兵隊駐屯用バラックを転用して行われた後、大正14年（1925）4月には近在の宝戒寺に移転して継続され、昭和3年（1928）5月末日で一応終了したとされている（鎌倉国宝館編 2015／浪川幹夫 2016）。この間、重要文化財木造北条時頼坐像（建長寺）や、同木造初江王坐像・同木造倶生神坐像（円応寺）、同木造地蔵菩薩坐像（浄智寺）などの旧国宝がこの美術院出張所で修理された。

ところが、鎌倉国宝館が開館したのちも修復事業は継続されており、少なくとも同8年6月まで実施されたことが、同館の日誌に書かれている（金子智哉 2021；その後の同氏の調査［談話］）。この

図6　開館当初の鎌倉国宝館　鎌倉国宝館

時は、当時未指定品であった県指定文化財の木造明庵栄西坐像（寿福寺）や木造阿弥陀如来立像（浄妙寺）などが、同館の修理所で修復されている（鎌倉国宝館編 2023）。

一方、鎌倉国宝館は、鎌倉同人会の活動のほかに、間島弟彦の遺族から多大な寄附を受けて建設され、昭和3年4月3日町立の博物館として開館した。建設の契機は大正関東地震の激甚被害によるもので、震災後5年で建てられている（図6）。前述したように当館開設の目的は、震災以前は東京や奈良・京都の博物館に並ぶ施設を建設することにあったが、地震で当地の文化遺産が破壊されると、不時の災害から由緒ある貴重な品々を保護し、一般に公開することに大きく変化した。そのため同館の収蔵品は、鎌倉のほか県内各社寺からの寄託品が全体の約半数を占めている。このことは同館の大きな特徴であり、さらに、これら寄託品は中世の歴史や美術史を研究するうえで欠かせないものとなっている。

まとめ ―文化遺産保護とその継承―

大正関東地震では、被災した諸堂社のほか社寺所有の文化遺産が、鎌倉に在住、あるいは別荘を所有した皇族・華族、政財界人らの寄附や、国庫補助による修理事業で、その多くが復興を遂げている。これら希有で貴重な文化遺産が不時の大災害を生き残り、そののちも長く保護されて現在に伝えられて来たことは、当時の時代性を考えたとしても、誠に感慨深いものがある。

近年では平成7年（1995）1月17日に「兵庫県南部地震」（災害名は「阪神・淡路大震災」および「阪神大震災」）、平成16年（2004）10月23日に「新潟県中越地震」（災害名は「新潟県中越大震災」）、平成23年（2011）3月11日には戦後最悪とされる「東北地方太平洋沖地震」（災害名は「東日本大震災」）が発生し、直近では令和6年（2024）1月1日に「能登半島地震」が起きるなど、日本全土で規模の大きい地震が頻発している。20世紀末から21世紀にかけて、わが国は巨大地震が連続する時期に入っているのかも知れない。

現在、大正関東地震から100年が経過した。今後、こうした大災害が発生した場合、果たして当時のような復興が成立するのだろうか。まず、人命が最優先で守られることは当然である。それに次いで貴重な文化遺産は、われわれに生活の豊かさや伝統技術を伝えるとともに、文化の継承者としての誇りをもたらす貴重な財産である。

鎌倉国宝館建設の項でも示したが、同館は不時の災害から文化遺産を保護する目的で建てられて、現在もそれらを安全に保管しながら広く一般に公開している。そして言うまでもないことだが、博物館は歴史や美術等の貴重な資料を収集・保管し、研究活動のほか展示などを行う施設である。前の大地震から文化遺産が復興・保護されたように、次に必ず発生する大災害から同じように再興させるためには、それら文化遺産について各々の価値を考究し、人々に判りやすく紹介しながら知識や興味を持たせ、それらを保護する気運を広く国の内外で高めることが、博物館の最も重要な役割であろう。だからこそ、これらのことは、後世に向けて、今後も繰り返し発生する大地震などからの文化遺産の修復や保全と、その継承に繋がるものと考えたい。

引用文献

中央防災会議編 2006『関東大震災報告書【第1編】』所収 井上公夫作成「図3-3 1923〔大正12〕年8月31日の等雨量線」https://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/kyoukunnokeishou/rep/1923_kanto_daishinsai/pdf/1923--kantoDAISHINSAI-1_06_chap3.pdf

鎌倉国宝館編 2015『特別展 鎌倉震災史 ―歴史地震と大正関東地震―』鎌倉国宝館

鎌倉国宝館編 2023『特別展 大正地震100年・元禄地震320年 2つの関東大震災と鎌倉』鎌倉国宝館

鎌倉町編 1930『鎌倉震災誌』鎌倉町役場 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1464097

金子智哉 2021「【総論】『鎌倉国宝館庶務日誌』に見る鎌倉国宝館の黎明期」『特別展 生誕一五〇年記念 間島弟彦と黎明期の鎌倉国宝館～その知られざる物語～』鎌倉国宝館

三浦勝男編 1969『鎌倉国宝館四十年略史』鎌倉国宝館

中西典明・谷口仁士 2011「関東大震災による鎌倉の歴史文化

遺産被害と復興」『歴史都市防災論文集』Vol.5 立命館大学歴史都市防災研究センター
浪川幹夫 2016「近代鎌倉の文化遺産保護と宝物館設立事情」『國學院大學博物館學紀要』第40輯　國學院大學博物館學研究室
http://www2.kokugakuin.ac.jp/museology/kiyou40.pdf
浪川幹夫 2023「【資料紹介】大正関東地震における社寺被災史料について」『鎌倉市教育委員会文化遺産調査研究紀要』第5号
https://www.city.kamakura.kanagawa.jp/rekibun/documents/5namikawa.pdf
宇佐美龍夫・石井寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子 2013『日本被害地震総覧』東京大学出版会